

ロータル、マイエル： 雑録

著者	鈴木，達治
雑誌名	龍南會雑誌
巻	3 9
ページ	2 7 - 3 0
発行年	1895-10-16
その他の言語のタイトル	ロータル、マイエル： 雑録
URL	http://hdl.handle.net/2298/4632

ロータル、マイエル

鈴木達治

有名なる獨逸國の化學者、ロータル、マイエル氏は六十四歳を一生涯として、本年四月十一日腦患を以て、遽かにツェービンケンに於て卒去したり。今や氏の訃音に接して悲嘆の情に堪へざるものは、獨り化學者のみならず、苟も學術を研究するものゝ、均しく皆痛嘆する處なり、是れ氏は教授及研究者として有益なる事業を成效し、殊に其著述したる *Die modernen Theorien der Chemie* 現今化學の原理なる書は、三十年間社會に好遇せられて、學術の進歩を催促したること尠少ならざるものあればなり。

ユリウス、ロータル、マイエルは、千八百三十年八月十九日ラルデンブルグのフアレルに生れたり、中學を卒業して後、千八百五十一年ツューリッヒに於て醫學生となり、全五十四年「血液中に於ける瓦斯」なる論文を草して、ドクトル、メヂチネの學位を受領せり。

氏は此學位を受けてより以後は、又醫學の研究に従事せず、其精細學術を好むの傾向は、終に氏をして化學の研究に従事せしむるに至りぬ。此時に當りてブンゼンの芳名中外に揚り、各國有爲の化學者は皆其實驗場を望んで、雲來するの際なりければ、氏も又此大賢の門に遊ばんとして、ハイデルブルグへと趣けり。

千八百五十六年の秋、高名なるエフ、ノイマンの數理的物理學の講義に列し、全五十八年ブレスラウに於て「ドクトル、フィロソフィー」の學位を受けて學生の生涯を終へたり。

暫時の後氏は *Ueber die chemischen Lehn von Berthollet und Berzelius* と題する、歴史的且批評的の論文を草して、ブレスラウ大學の物理及化學のプリファートドチエントとなり、併に生理部の化學を

擔當せり。千八百六十六年の秋此地位を去りてエベルスヴァルデーに至り、同處山林學校の理科學の
 ドーチエントとなる、後二年カールスルーへに於ける技藝學校に於て、初めて化學のプロフェッソルに
 昇り、千八百七十六年フイツチヒの後任として、ツュービンゲン大學に赴任せり、健固なる肉體及精
 神上の勇氣を以て、死に至るまで同大學に於て教授の職に坐し、大に同僚の尊敬と數多の學生の信用
 を博したり。

既に陳述せし有名なる著書「現今化學の原理」の第一版は、千八百六十四年を以て世に出でたり、マイ
 エル氏が生涯の事業、即ち化學理論の集合總括及其發達の大業は、亦此れと共に起れりと云ふ可し。
 本書は當初、歴史批評的のものなりしが、漸次に發育して終に今日吾人が見るが如き廣大なる化學書
 となり、既に其五版に至りしが、猶其次版將に成るに垂んとして、今や著者は逝きたり、悲む可きか
 な。本書出版後社會智識の程度は、未だ本書が一般公衆の需要に適し難きを見、千八百九十年氏は更
 に *Grundzüge der theoretischen Chemie* 「理論化學の概要」と題する一書を上梓えたり、是れ前書の原
 理を摘要簡約えたるものにして、此書又大に社會の好遇を得たり。

氏が第三の著書は *Die Atomgewichte der Elemente* 「元素の原子重」と稱するものにして、氏が久ま
 く氏の助手たりしプロフェッソル。カール、ソイベルト氏と協同えて、千八百八十二年までに出來あ
 る、元素の原子重測定の新計算を發表したるものにして、化學の此部分に従事する、總ての研究者よ
 り、歡迎を蒙りしものなり、此れ永年の間化學原子の性質と分類に就ての研究の、結果にして、ロータ
 ル、マイエルの名聲をして、周期律の歴史と相離るべからず不朽ならしむる處のものなり。

現今化學上に於ける最大法則の一たる、周期律の發見の由來を語るもの、誰かロータル、マイエルを

言はざるものあらんや。眞理は人類の共有にして私物にあらず、故に何人の之を發見するも、妨げな
き。雖も國家的の感情は、一時英獨魯の三國の學者をして、周期律發見の卒先者に就て争はせめたり
き。今日に於ては、魯のメンデレエフ氏は獨り周期律上に於ける功名を占領する狀況なるも、斯の如
きの大發見は、豈に前後を斷絶して忽然として顯はるものならんや。發見の豫意は既に當世紀の初
プラウト及びマイニケを経て、幾多の材料を集め來りたるものなり、然らば其發見の功名を一人に私
せしめんとする靈力は、如何に狹隘なる思想なるよ。此が爲に腦漿を費し、此が爲に刻苦したるもの、
均しく其榮を分つことを得べし。ロータル、マイエル氏は千八百六十九年十二月に *Die Natur der ch-*
emischen Elemente als Function ihrer Atomgewichte なる論文を作爲し、元素の原子重と其性質の關
係を研究したる結果を公にせり、此れ氏が始原の學說なること疑なかるべしと雖、其所說魯の化學者
の如く精且詳なること能はざりしは、又遺憾なりと云はざるべからざるなり。

氏は以上の如き文學的理論的の化學事業の外に、猶實驗的研究に従事し、此二十五年來氏單獨に、或
は其門弟と同著にて、獨乙化學會誌及リービヒ年報上に掲載したるもの、又尠少にあらざるなり、假
令氏は當代第一流の化學者にあらずと雖、其著書は或一派の化學者間に、大に尊敬珍重せられ、又明
ろに化學古典として後世に傳はるべく、其周期律と相伴ふ名聲は、化學のあらん限り共存するなら
ん。

氏は伯林及セント、ペートルブルグのアカデミの會員并に倫敦化學會外國會員たり、又英國の皇立學
會は周期律に關する效績に報ひんが爲め、千八百八十二年メンデレエフ氏と同時に、氏にデーヴイ賞
牌を捧呈して其好意を表したり。

氏精神活潑不撓にして、加ふるに靜謐なる生涯を以てせり、其書生に對する懇篤にして管に有爲の教師として登臨するのみならず、實に其門下に入りてより後は氏は彼等に對して一生の益友たるなり、同僚并に市民は氏が思想の富麗と天性の高尙なるを崇敬せり、今や此功勞ある化者學迹矣、茲に其略傳を掲て追想の意を表す。

蓑笠記

東籬園樵夫

樵夫もと閭里の産、瀕りに田遊の壯觀を喜び、好んで文人墨客の紀行を繙く、然れども足未だ家門を出つるに及ばず、空まぐ鶏犬の群に伴ひ、此君木公と親む久矣、會々事を以て奥に出て松嶋に遊ぶや、賞心頗に激發せ、益々天下の名山大川を窮め、名所舊蹟を探らんと欲するの念胸間片時も去り難く、遂に東の方金華山に登り、更らに北向して北上川を溯り、東尊寺に詣て衣川の關を觀、平泉の故趾を吊ひ、平生の願ひ僅に報ゆるを得、衷心私に謂らく、操觚遍歷の快南面の樂に優る萬々、況んや未徑不見の勝跡を探り異風郷俗を識るの益は士君士の薰陶に勝るものあるをや、是に於てか忙中と雖とも少しく間の乗すべきあれば、乃ち出て、郊外に遊び聊か以て案牘の勞を遣れり、青鞋布襪また風流、只だ恨むらくは賦性極めて魯驚未だ李杜韓柳の能事なきと、さればなり匣底紀行に乏乏からずと雖とも他見を憚て敢て投稿する所なかりき、今夏偶々學に五高に遊ぶや、不肖また龍南會員の末席を汚し、先輩の驥尾に附して共に本會の隆盛を期すべき幾分の責任を分たるゝに遇ふ、榮や又大なり、時に深秋九月中旬雜誌發兌の期に當り編輯員瀕り